

あらた同窓會

令和元年 秋季号

令和元年11月23日発行

鹿児島大学農学部
あらた同窓会
学生会員向け会報

電話 099-285-8537



「実りの秋」を迎えた農学部附属農場





農学部附属入来牧場 Vera 電波望遠鏡



改修になった入来牧場管理棟



農学部附属農場からみる鹿児島市立病院



農学部附属農場水田の合鴨

目 次

1. 巻頭言……「Youは何しに大学へ？」	藤 田 晋 輔	2
2. 「鹿児島大学農学部の世界に向けた教育」	橋 本 文 雄	3
3. 学生向け講演会 「国際協力の現場から」		
－ 30年間の経験を通じて考えた途上国支援－	福 山 誠	4

ビバ・キャンパスライフ

●農業生産科学科

4. 応用植物科学コース		
「私らしい人生」	作物学研究室	学部4年・佐々木 香菜子 6
5. 畜産科学コース		
「アナグマに費やした大学生生活」	家畜管理学研究室	学部4年・萩之内 竹 斗 6
6. 食料農業経済学コース		
「大学生活を振り返って」	農業経済学研究室	学部4年・榎 田 浩 人 7

●食料生命科学科

7. 食品機能科学コース		
「4年間の大学生活」	生命高分子化学研究室	学部4年・松 田 三 奈 7
8. 食環境制御科学コース		
「私のドキュメント3.5年間」	食品保蔵学研究室	学部4年・松 原 萌 8
9. 焼酎発酵・微生物科学コース		
「今までを振り返って」	醸造微生物学研究室	学部4年・中 尾 有 伽 8

●農林環境科学科

10. 森林科学コース		
「大学生活を振り返る」	森林保護学研究室	学部3年・森 優 真 9
11. 地域環境システム学コース		
「前髪の白髪」	農地工学研究室	学部4年・福 元 千 賀 9

●国際食料資源学特別コース（農学系サブコース）

12. 「ガンジーでもガンディーでもどっちでもいいやん」…植物栽培・機能学研究室	学部3年・石 内 海 帆	10
--	--------------	----

教育実習奮闘記

13. 「教育実習を終えて」	農業生産科学科 観賞園芸学研究室	学部4年・姫 野 歩 美 10
14. 「教育実習で学べること」	食料生命科学科 食品保蔵学研究室	学部4年・久 原 大 雅 11
15. 「教育実習を終えて」	農林環境科学科 砂防・森林水文学研究室	学年4年・加世堂 収 11

インターンシップ体験記

16. 「インターンシップを終えて」	農業生産科学科 農業経営学研究室	学部3年・有 川 俊 光 12
17. 「インターンシップを振り返って」	食料生命科学科 土壌科学研究室	学部3年・上芝原 日 菜 12
18. 「インターンシップを終えて」	農林環境科学科 森林政策学研究室	学部3年・大 津 敬 太 13

介護体験記

19. 「介護等体験を終えて」	農業生産科学科 害虫学研究室	学部3年・久 保 悠 13
-----------------	----------------	---------------

留学報告

20. 「デンマーク生活」	農業生産科学科 害虫学研究室	学部3年・木 本 朝 美 14
21. 「国際協力農業体験講座を通して」	国際食料資源学特別コース	学部1年・植 野 真 由 14
22. 「世界の中の日本」	食料生命科学科 食品保蔵学研究室	学部3年・今 村 仁 風 16
23. 「欧州海外研修報告」	農林水産学研究科 森林政策学研究室	修士1年・加 藤 小 梅 16

編集後記		17
------	--	----



Youは何しに大学へ？

鹿児島大学農学部あらた同窓会
会長
藤田 晋 輔

例年になく暑かった夏も過ぎ、爽やかな秋の気配を感じるようになると共に、時の流れは早いもので、今年もあらた同窓会報秋号発行の時期になりました。

そこで、今年は何を題材にしよう・・・？ 頭をよぎったのは、東京テレビ系列の番組「Youは何しに日本へ」である。この番組が平成13年1月9日から毎週放映され、18年も続いているところに大変興味がある。日本に到着した外国人を勝手に「羽田空港や成田空港等」で出迎える。中には何回も日本を訪れて、日本人よりも通の外国人もいるが、初めての人もいる。さらには、当人の了解を得たら日本滞在期間中、時に外国人が目的とする地まで行き、目的を完遂する姿を紹介する「バラエティ番組」である。中には物見雄山の外国人もいるが、単純なバラエティではない。個々の外国人は目的、考え方、大げさに言えば、訪日目的が明確で、哲学的思考までを映像から感じる。そこには、視聴者があって番組の中身が大きく評価される時代であるので、製作者（放送局）は多くの外国人と接触して、「実あり」と評価される番組を目指しているのであろう。取り上げる国も先進国、後進国関係なくバラエティに富んでいる。出演者の考え方、個々の思いを感じる番組でもある。

そこで、出迎える立場になって、空港でなく鹿児島大学に場所を設定してみた。これを書き始めた数日後に平成10年に開設された放送大学鹿児島学習センターから機関紙「かいこうず」第85号（最新号）が届いた。放送大学とは、入試のない通信制大学であるが、多くの課程があり、大学院修士、博士課程まである。鹿児島学習センターの学生受け入れは平成10年10月と全国でもかなり遅い。創立時は鹿児島県警の旧舎（現在は新築された鹿児島市議会の建物）に間借りであった。筆者は鹿児島学習センター長である島田俊秀先生、当時の教員は島田俊秀センター長1名、何故か筆者に声がかかり、2年間2名であった。（結局、平成9年9月～平成20年まで客員教授を務めた鹿児島学習センターの学生受け入れは平成10年10月。）当時在学生数は全国（人口比）の5番目以内にあり、毎期一喜一憂であったことを思い出す。当時の大部分の学生は高校卒業の社会人で、中・壮年の女性が多く、男性はわずか数名に過ぎなかった。理由は簡単である。当時の社会背景から見ると、高校卒であれば、年齢は問わない。入学試験はなく誰でも入学できる。ただし、卒業は非常に難しい。高校（一部短期大学）を卒業後、社会人として働き、子育てが終わり、子供が大学に入学したから自分も大学生を目指す人が多かった。多くは明確な目的意識と自己研鑽を目標とする等、現在の立場に見合った能力を高めたいとする目標等が明確で、それだけに「学びに対する欲望」が高い学生が多かった。放送大学の学生の入学動機（85号）を見ると、今でも「目的を明確にした学び」である学生が多い。それなりに年齢を重ねているので、「学びたい」とする欲望は一層大きい。このような状態であるから教員側も熱が入り、持てる能力すべてを出し切るので、教員もそれだけに充実感があり、心地良い疲れとなる約12年間であった。

ところで、鹿児島大学の学生諸君もそれぞれに目的をもって、我が大学の門を叩いたに違いない・・・。中には①小学生時代に芽生えた目標に挑戦している人、②大学に入学して学ぶ間に目覚め、目標が定まる人、③そうでない人もいであろう。一方、大学を①高校時代の成績で大学を単純に選ぶ、それとも②大学名に関係なく、自分の将来像を描き、目標とする学部を選択したのだろうか？ 前者、後者ともに、「いずれの選択が良いか」は、その後の学びの目的と姿勢にかかわってくる。現在の鹿児島大学農学部生に「Youは何しに大学へ！」の答えと理由、加えて今の満足度、そして、今日これから先の君の夢を聴き、来年3月に達成感を待とう。



「鹿児島大学農学部の世界に向けた教育」

農学部長

橋本文雄

10月の台風19号豪雨災害にて多くの方々がお亡くなりになりました。哀悼の意を表しますと共に、ご遺族や被災された方々へお見舞い申し上げます。

あらた同窓会、在校生の皆様、こんにちは。平成31年4月1日を以て農学部長に就任いたしました橋本文雄です。よろしくお願い申し上げます。

本年4月1日、大学院農学研究科と大学院水産学研究科が連携し大学院「農林水産学研究科」を開設いたしました。本研究科は、ICT化など先進的スマート農畜林水産業を創出する人材や食の安全・品質保証・グローバル化に適応可能な人材の養成など、農学分野と水産学分野双方の高度な知識を有する人材を養成することを目的としています。この再編によって農水融合型となった食品創成科学専攻では、南九州の地域生物資源を用いた新しい食品の創成と先端的生命科学に基づく地域志向型人材の育成を目指し、同じく、農水融合型の環境フィールド科学専攻では、環黒潮圏の陸域・水域に跨がるフィールドを教育の場とした実践教育による環境科学を活かし地域の課題解決に貢献する即戦力となる人材養成を目指します。一方、従来の伝統的な農学と水産学の教育研究をコアとする農林資源科学専攻および水産資源科学専攻では、スマート社会に対応した生産性革命を可能にするイノベーションにより地方創生を支援することを目標とし、農学・水産学の各分野の専門領域を中心とした問題提起・解決能力を持つ地域課題に対応可能な人材を育成いたします。

さて本年度、高隈演習林は「鹿児島島の自然とくらしと林業をつなぐ学びの森拠点」と題して「教育関係共同利用拠点」に再び認定されました。これは平成26年度に認定されて以来2期目となり、平成26年度からの第1期5年間では2,996名の研修者を受け入れてきました。第1期では、九州を中心に様々な大学、短期大学、高等専門学校など、大学間のネットワーク化を図りながら利用の希望に応じてきましたが、第2期では、社会全体の構造が大きく変化する時代のニーズに応え、学んだ知識・技能を実践・応用できる力、問題の発見・解決に取り組む力の育成を行う計画です。

農学部では短期海外研修プログラムを単独で9プログラム実施していますがご存知でしょうか？この20年間で派遣した学生数はのべ681名、海外の大学より受け入れた学生数は105名となっています。中でも特に、平成30年度より開始した大学の世界展開力強化事業「米国から鹿児島、そしてアジアへ～多極化時代の三極連携プログラム～COIL」は、鹿児島の地の利（物理的な最端性と文化的な境界性）を生かした魅力的な受入プログラムの開発、グローバルな視点による地域課題への挑戦、国際協働による多極化時代の新しい秩序（共生の枠組み）を構築することの3本の柱を軸に協定校との双方向の教育研究を展開するもので、食料生産分野・グローバル牛肉生産（テキサスA&M大学とチェンマイ大学）；食の安全分野・品質管理と鮮度保持技術（オクラホマ州立大学とメーファールアン大学）；食と健康分野・機能性食品と伝統食（ノースダコタ州立大学と湖南農業大学）；の3つの研究分野で交流を加速化しています。これらの他、農学部では国際農学・農業体験講座（タイ・ミャンマー・ベトナム）、グローバル人材育成（雲南）、国際森林論・ロッテンブルグ林業大学研修（ドイツ）、香港インターンシップ、国際感覚を持つバイテク人材育成（タイ）、食料環境システム学Ⅲ・国際基準HACCP教育（タイ）を開講しています。

農学部・大学院修士課程に在学中の皆様には、これらのプログラムへ参加することをお勧めし、国際感覚の醸成に挑戦されてはいかがでしょうか？

学生向け講演会（令和元年 10 月 2 日開催）

「国際協力の現場から」- 30年間の経験を通じて考えた途上国支援 -



国際航業株式会社
海外コンサルティング部

福 山 誠（林・昭和 63 卒）

1988 年（昭和 63 年）に本学農学部林学科を卒業して以来、約 30 年間に亘り国際協力に従事してきた。最初のキャリアは青年海外協力隊で、タンザニアに森林経営という職種で派遣され、1 年延長し 3 年間勤務した。協力隊では、植林や天然林保全といった実践的な業務経験を積むことができたほか、チームワークやトラブルシューティング等に係る多くのことを学んだ。帰国後、国際開発に関わる社団法人や民間企業に所属し、国際協力機構（JICA）や林野庁からの委託による調査事業や実際の現場（プロジェクト）での活動の実施にコンサルタントや JICA 専門家として従事した。その間、約 30 ヶ国で仕事をする機会に恵まれたが、長期滞在したのは JICA 長期派遣専門家で赴任したベトナム、カンボジア、ウガンダ、ミャンマーで、林業や農村開発プロジェクトに約 11 年間に亘り関わるようになった。学んだことは数多くあるが、中でも援助の受益者、例えば村人／農家などが主体的にプロジェクトに関わるような仕組みを構築すること、また人材や資材、制度といったローカルリソースを可能な限り活用すること、活動の持続性・発展性に常に注意を払うことなどが教訓として得られた。

JICA 専門家やコンサルタントに求められる資質として、①分野・課題専門力、②援助関連知識・経験、③地域関連知識・経験、④問題発見・調査分析力、⑤コミュニケーション力、⑥総合マネジメント力の 6 つの能力が挙げられている。そのうち、筆者が特に重要と考えるのは、問題発見・調査分析力、コミュニケーション力、総合マネジメント力の 3 つである。専門技術に関する知見だけではなく、カウンターパートと呼ばれる相手国政府のパートナーと緊密なコミュニケーションを取りつつ協働し、問題・課題を発見・分析し、計画を立て、実際の活動を推進するなど全体のプロセスをマネジメントする能力が必要だからだ。その他にも、分野横断的事項として、持続可能な開発目標（SDGs）（特に汎用的な貧困問題、ジェンダー、地球温暖化）やマーケティングに関する知見も肝要である。マーケティングについては、「業」という字が付くセクターである農業、林業、水産業などにとっては必須のコンポーネントであるにも関わらず、商学部や経済学部以外では殆ど学ぶ機会のない科目であるので、自主的にあらゆる機会を捉えて基礎を学んでもらいたい。また、特に外国人とコミュニケーションをとる際には、最終的には本人の持つ民度や人間力といったものが大事である。この点について説明するのは容易ではないが、日本人とし



での常識や価値観、美德を持ち合わせていれば、全く問題になることはないので、安心頂きたい。

将来、国際協力関連での仕事を志向する学生の皆さんには、青年海外協力隊、NGO/NPO、JICA、開発コンサルティング企業といった道があることを紹介したい。大学卒業後すぐに我々のような開発コンサルタントになることも不可能ではないが、協力隊は国際協力の登竜門として色々な意味で恵まれた制度であるので、是非一考頂ければと思う。また海外留学も将来のキャリアパスを考える上で、大変重要である。筆者も英国のウェールズ大学大学院（修士課程）で農村資源管理学を修めたが、専門分野の修得、語学力の向上、人的ネットワークの構築といったメリットを享受することができ、またその後の仕事の受注にも大きなインパクトがあることを実感している。

最後に、進路についての心構えを少し話すと、まず一度就職したら最低3年程度は継続して勤務することをお勧めしたい。3年という期間に大した根拠はないが、やはりある程度仕事のことが分かるのがそれくらいの期間と考えるからだ。また、途上国で勤務する場合には、途上国の人々から学ぶ姿勢を忘れず、開発に真摯に取り組むこと。途上国というと援助される側ではあるが、援助する側の我々が到底太刀打ちできないような優秀な人材が幾らでもいるのが現実だ。更に、知人等から仕事の紹介を受けることもあるかと思うが、ある程度の条件に合っていたらあまりこだわらずにそのオファーを受け、流れに乗っていくことも一案である。これについては情緒的な考えと思われるかも知れないが、スタンフォード大学の教授が提唱した「計画的偶発性理論」では、「個人のキャリアの8割は、予想しない偶発的なことによって決定される」と述べられており、一定の科学的根拠があることが明らかになっている。したがって、自分の興味を惹かれることに素直になりつつ、気楽にオープンに構え、偶然を自分なりに計画的に設計してキャリアをより良いものにしていく気構えが大事だと考える。

国際協力の仕事というのは、大変なことも勿論多くあるが、それだけにやりがいもあり、多くの見返りもあるものである。今回の講演が、学生諸君、特に海外での仕事を目指す諸子にとって、少しでも参考になったことを祈るのみである。





農業生産科学科

応用植物科学コース



「私らしい人生」

作物学研究室

学部4年 佐々木 香菜子

私は大学生活の4年間、今まで経験したことのないことに挑戦するという目標を持って過ごしてきました。中でも、最も自分に影響を与えたと思うのは、薩長同盟酒プロジェクトです。

このプロジェクトは、明治維新150周年を記念して、鹿児島大学と山口大学と地域が協力して新しい焼酎を作るというものです。最初は、焼酎の原料となるサツマイモの収穫のお手伝いでしたが、稲の収穫や焼酎の名前を募集するポスターの作成、命名の会議、焼酎ラベルのデザインの選考会など多くのイベントに参加させていただきました。そして2018年6月、新焼酎「薩摩熱徒」の完成を祝して制作発表会が行われました。発表会当日、初めて完成した薩摩熱徒を目にし、自分たちの頑張りが形になったのだなと感動したことを今でも覚えています。他にも、東京で開催されたアグリビジネス創出フェアへの参加や、雑誌の取材など情報発信のための活動を行い、現在も来年度の薩摩熱徒販売に向けて原料の栽培やブログ更新を行っています。

多くの貴重な経験ができたこのプロジェクトですが、自分が最も喜びを感じたのは、薩摩熱徒を飲んだ方々から美味しかったよとお褒めの言葉を頂いた時でした。自分の作ったものが人の手に渡り、感謝されることがものづくりの楽しさであるということを実感した瞬間でした。また、多くの経験の中で、自分は人とコミュニケーションを取ることが得意で、人を笑顔にさせることが好きなのだと気づきました。この発見を軸に就職活動を行い、良いご縁があり、来春からは住宅会社の方で営業として働かせていただくことになりました。

大学生活の4年間を通して、挑戦することは自身の

成長や発見に繋がるということに気づきました。この目標を大学生活だけの目標にするのではなく、人生の目標として、これからも多くことに挑戦し続け、私らしい素敵な人生を送りたいと思います。

畜産科学コース



「アナグマに費やした 大学生活」

家畜管理学研究室

学部4年 萩之内 竹斗

私は大学生活の半分以上をアナグマに費やしている。そのためここではアナグマ追求の大学生活について少し紹介したい。

まず、皆さんは「アナグマ」という動物をご存知だろうか。分類ではイタチの仲間であるが見た目はタヌキや犬に似ており、鹿大生のインスタのストーリーにも“#大学にタヌキいた!”と添えられた投稿をよく見る名前を間違えられがちな動物である。ここで、勘がいい人は気付いたかもしれないが、鹿児島大学の郡元キャンパス内にも野生のアナグマが存在しているのだ。意外と気付かれてはいないが身近に存在している野生動物である。

私がアナグマについて興味を持ちはじめたのは大学1年の時である。バイクの免許を取ってすぐの頃、夜の道を走っていると急にアナグマが飛び出てきた。とっさに避けようとした自分はそのまま転倒をしてしまった。そう、きっかけはアナグマに“殺されかけた”のである。幸い大きな怪我はなかったものの犯人であるアナグマは倒れている私に気付く様子もなく山に消えた。この経験からあの動物は何者だと調べはじめた。きっかけは最悪だが、調べていくうちに自身の知的好奇心を刺激され満たされていることを感じ、気付けばやめられなくなってしまっていた。

現在は、研究室に所属したこともあり卒業論文としてアナグマの追求をさせていただいている。具体的には、鹿児島大学内に生き物が動くと反応するセンサーカメラの設置や痕跡の調査、さらには夜中にアナグマを探し回り見つけ次第追跡を行っており、まるで“ダーウィンが来た”で行っていきそうな研究を日々行っている。まさに大学生でないとできない特殊で魅力的な生活である。

学部生としての生活も残り少なく、この追求ができ

る時間についても僅かとなってしまったが最後までア
ナグマ追求ライフを謳歌していきたい。

食料農業経済学コース



「大学生活を振り返って」

農業経済学研究室

学部 4 年 榎田 浩人

大学生時代は人生の夏休みと呼ばれることもある。しかし実際にはそう楽しい日々ばかりではなかった。毎週、英語の授業の度に課される、予想をはるかに超える量の宿題。テスト期間に課される膨大な量のレポート課題。そして、一夜漬けでは到底太刀打ちできないテスト勉強。気づいたらもう大学4年生の折り返し地点を過ぎ、現に今は卒業論文に追われている。

大学生活を振り返ると大変だった思い出や骨が折れるような経験も多くあったように思えるが、もちろん楽しい思い出もたくさんできた。1日の半分以上をバイクの上で過ごした佐賀・長崎ツーリング。街ですれ違ったマッチョに憧れて始めた筋トレも楽しい思い出の1つだ。大学4年間で私は脳細胞よりも筋細胞の方が増えたかもしれない。農経で模擬店を出店した学際も良い思い出である。様々なアルバイトも経験させていただいた。1番最初は塾講師のアルバイト。まるで弟や妹のようにかわいい教え子たちに巡り会うことができた。そして騎射場の中華料理屋にもお世話になった。たくさんの美味しい料理をふるまってくださった店長には感謝しかない。今は、カフェでも働かせてもらっており、本当に良い経験をさせてもらった。

私たち4年生は大学生活の4年間で様々な力を身につけてきた。これからはそれぞれの道へと進んでいく。自分の選択が正しいのか間違っているのかもわからない。そんな時は、大学4年間で身につけた知恵と賢さをフル活用して自分の選んだ道を正解にする努力をすればよい。同期のみんながそれぞれの世界で活躍する姿を励みに私も頑張っていこうと思う。

最後にはなるが、大学生活4年間で私に関わって下さった先生方、同級生、先輩や後輩、全ての方に感謝を申し上げたい。皆様のおかげで本当に楽しい大学生活を送らせていただいた。そして、何不自由なく大学生活を送らせていただいた両親にもこの場を借りて「ありがとう」と伝えたい。

食料生命化学科

食品機能科学コース



「4年間の大学生活」

生命高分子化学研究室

学部 4 年 松田 三奈

本当に早いもので、気が付けば4年生になっており、大学生活も残すところ半年です。

平成28年4月、熊本が地元であったため、大学に入学してから初めて親元を離れて生活することになりました。桜島の噴火、降灰、初めての土地や人、学校という環境に戸惑うことばかりでしたが、新しいことにチャレンジするには絶好の環境だとも思いました。

サークルは高校生の時に入ろうと思っていて入り損ねた裏千家茶道部へ入部することにしました。初めての茶道で分からないことも多かったですが、先輩や先生が丁寧に教えてくださいました。先輩方が引退してからは、茶会運営や後輩の指導を行うことになり、忙しいけれど充実した日々を送ることが出来ました。今は引退し、たまに活動に顔を出したり、茶会の招待状を受けとったりすることが嬉しいです。ついこの前まで、自分が送っていた招待状を自分が受け取る側になっているというのはなんだか不思議な気分になります。この招待状は社会人になってからも届くので、その日が楽しみです。

大学生になってボランティアを始めました。そのボランティアとは、献血を呼びかける献血推進ボランティアです。献血についての知識を身につける研修や大学構内、街頭での呼びかけ、呼びかけの準備等、様々な経験をすることができました。また、私は献血を呼びかけるだけではなく、献血も行っており、今後も続ける予定です。希望者には血液検査の結果が返ってくるため健康維持にも役立ちます。読んでいる方にも是非献血をお勧めしたいです。

アルバイトは自分で働いてお金を稼ぐ初めての機会でした。ここでは人と連携して仕事をすることの重要性を学びました。また、他大学の人や社会人の方と交流できる貴重な機会でした。

こうして振り返ってみると、楽しい大学生活を送ることが出来たと思います。残り半年の大学生活も楽し

(8) あらた同窓会学生向け会報

みつつ、やるべきことを精一杯頑張りたいです。

食環境制御科学コース



「私のドキュメント 3.5 年間」

食品保蔵学研究室

学部 4 年 松原 萌

よく変人だと言われます...松原萌です。最近出会った中国人とタイ人にも変人であるお墨付きをいただいたため、本物の変人になりつつあります。さて私は、大学卒業後、放送局でディレクターをすることになりました。農学部ではレアな就職先だと思うため、私が伝える仕事をしたいと思った理由を書きます。まずは、3.5 年間の振り返りを。“人とのつながり”の大切さを教えてくれたお茶間屋でふりかけを開発するインターン、謎のタイ風卵焼きを教えてくれたタイ人や高倉健が大好きな中国人大学生、人生経験が豊富すぎるオーナーなど自分から新たに人と出会いにいく面白さを知れた北海道のユースホステルでのアルバイト...興味を持ったことをやり尽くしました。そして、研究・勉強していることが社会貢献に深く繋がること多い農学部での学びも、将来の基盤となりました。豊富な出会いとそこで開けた視野は、“伝える仕事がしたい”原点です。

また、登山中に遭難しかけたこと、学生実験が激的に遅かったことなど、私は学生生活で数々の失敗と挫折をしてきました。きっと、失敗を積み重ねた数は、農学部で 1 位を取れると思います。でも、その失敗や挫折も“伝える仕事がしたい”原点です。失敗した時、心にジーンとくる言葉をかけてくれた人に会ったり、同じ失敗をした人の気持ちが分かったり、そんな経験を繰り返しているうちに、誰かの日常に寄り添えるような番組を作りたいと思うようになりました。失敗を肯定することはできませんが、失敗したときにこそ出会えるきっかけや学びもあります。



最後に... この文章を読んだ方の中には、きれいな事を並べた文章だと感じる方もいるかもしれません(泣)。でも、そんなきれいな事の中から、将来に生きる気づきやきっかけを感じてくれる人がいたら、こんなに嬉しいことはありません...(笑)。そして、面白いネタがあれば、ぜひ私に教えてください！

焼酎発酵・微生物科学コース



「今までの振り返って」

醸造微生物学研究室

学部 4 年 中尾 有伽

私が鹿児島大学に入学しようと決めたのは高 3 の夏でした。中学生のころから食品開発者になりたいという夢を持っていた私は、どこの大学に進学すればよりその夢に近づけるのか、とても悩んでいました。そんな時、母が鹿児島大学農学部のオープンキャンパスに行くことを勧めてくれました。このことがきっかけで私は鹿児島大学に興味を持ち、調べていくうちに食料生命学科に入りたいと思うようになりました。



2016 年の 4 月、無事に鹿児島大学へ入学することができ、喜びと緊張の中、大学生活がスタートしました。知り合いが全くおらず、友達ができるのか不安でいっぱいだったことを今でもはっきり覚えています。しかしそんな心配も杞憂に終わり、友人たちと切磋琢磨しながら、楽しく大学生活を送ることができました。3 年生前期になるとコース配属が行われました。入学した当初は別のコースに入りたいと考えていましたが、「鹿児島ならではの勉強をしたい」と思い、焼酎発酵・微生物科学コースへ進むことを決めました。そして、焼酎に関する講義を受けるうちに醸造に関して興味を持ち、醸造微生物学研究室に入りました。研究室に配属されてからは、毎日があっという間に過ぎ去っていきました。何をどうすればいいのかわから

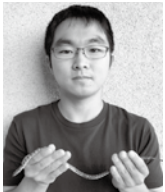
ず、手探り状態の日々。そんな私にどんなに小さなことでも優しく丁寧に教えてくれた先生方や先輩方にとっても感謝しています。この研究室に配属されて本当に良かったです。

私は来年の春から、中学生のころからの夢だった食品開発者として働けることになりました。きっと悩んだり挫折しそうになったりすることもあると思います。そんな時は、大学4年間で学んだことを思い出し、励んでいきたいと思います。



農林環境科学科

森林科学コース



「大学生生活を振り返る」

森林保護学研究室

学部3年 森 優真

大学に入学したことで、私の中で変わったと思うことが幾つかある。その中でも、特に入学できて良かったと実感を得ている変化は、行動圏の変化である。これまで、中学生までの通学路は徒歩圏内であり、高校生の時はバス通学だった。また、休日に外出する機会も少なかったため、登下校時に行ける以上の範囲へ足を伸ばす機会が少なかった。しかし、大学入学後、普通自動車免許・普通自動二輪免許を取得したことで、私の活動範囲は大きく広がった。自分の興味、関心の向いたところへ、より積極的に行く機会を得られた。

行動圏の拡大は、私に多くの生物を目にする機会を与えてくれた。私は、昆虫などの動物に強い興味、関心がある。鹿児島大学は、その敷地内に数多の木々が点在し、様々な樹種が育つ植物園や、高隈演習林といった自然が豊富な場所がある。ここを歩くだけで花や樹木の移り変わりやチョウ、セミなどを通じて季節ごとの生物相の変化を間近で感じられるが、より詳しく、樹幹や地面を観察すれば、様々な生物が隠れていることがわかる。私が発見できた生物でも印象深いのは、近年減少していると言われるヤマトタマムシや、イリドウイルスに感染したと思われる青



く変色したワラジムシ、そして移入種ではあるが日本最小の蛇であるブラーミニメクラヘビの発見である。サークル活動でも、甲突川や川内市の用水路で生物採集をしたり、薩摩硫黄島や甕島を訪れて野生化したクジャクや、県本土では見かける機会の少ないサソリモドキを見たりした。その他にも、大学生となって初めて、野生で、間近で見つけた生物はたくさんいる。知らなかった場所に行って新しい生物を見つけることは本当に楽しく、嬉しい。

このように、自分の行動圏が拡大して、様々な生物に触れ合う機会に恵まれたことこそが、私が鹿児島大学に入学して良かったと心底感じる理由である。

地域環境システム学コース



「前髪の白髪」

農地工学研究室

学部4年 福元 千賀

私は大学3年生時、進路を決めました。地方公務員です。しかし、公務員になりたいと簡単に決めたものの公務員になるには公務員試験に合格しなければなりません。私は大学受験で苦労したので試験という名の付くものは嫌いです。はあ、また試験勉強しなくちゃいけないのか、と憂鬱な気持ちになるとともに、大学生になってからまともに勉強してこなかった私の脳みそはカチコチに固まっていることに気が付きました。3年生の5月に始まった公務員講座を受講し、周りに置いて行かれないよう必死についていき、ときに自分の出来の悪さに苛立ち、模擬試験の結果に絶望し、そんなつらい時期が続きました。丁度その頃、ストレスで前髪に白髪が数本生えてきました。その時はなぜか初の白髪に喜びました。(前髪の白髪は、一般的には便秘などの肛門関係の病気が原因だと言われている。デスクワーク作業が多くなり、肛門付近を酷使してしまうことでストレスがたまり、血行不良になってしまう。この血行不良が前髪の白髪へとつながるらしい。)

そして時は過ぎ、ついに迎えた公務員試験。なんと大嫌いな試験を乗り越えたとホッとしている暇もなく、面接練習が始まりました。何度か面接練習を受けて思ったことがあります。試験の勉強している方が楽だなと。本番では緊張しすぎて口の中はカラカラ、手の震えと手汗が止まりませんでした。ここまでの話を

(10) あらた同窓会学生向け会報

聞いていると、この人は合格できたのだろうかと思われるかもしれませんが、無事第1希望のところに合格できました。そして私は、前髪に生えた7本の白髪をすべて抜き、さよならしました。これで私の就職活動は幕を閉じます。はあ、旅行にでも行くかと思ったのも束の間、卒論地獄へと続く扉が開けられたのです。さて卒業までのあと半年間で、私の前髪に新たなるストレス性白髪は何本生えてくるのでしょうか。乞うご期待です。

国際食料資源学特別コース(農学系サブコース)



「ガンジーでもガンディーでもどっちでもいいやん」

植物栽培・機能学研究室

学部3年 石内 海帆

「トミーヒルフィガー」か「トミーフィルヒガー」か、「ガンジー」か「ガンディー」なのか、曖昧にしたまま大学生活を送っていた。そんなこと知らなくたって恐らく大学生活にたいした影響はないだろうが、どうやら「トミーヒルフィガー」が正しいようだ。さらに言えば、“TOMMY HILFIGER”が正解である。

周りの環境や関わる人間によって、自分の考え方や興味の方向が変化することを大学に入って実感する。特に私は周囲の人間による影響を受けやすい。“TOMMY HILFIGER”のことを、高校生の頃の私は知らなかったはずだ。少なくとも、買おうと思ったことはなかった。しかし大学に入り、久しぶりに会った地元の友人が“TOMMY HILFIGER”を着こなしているのを見て、感化されてしまった。

さて、ここまで“TOMMY HILFIGER”を語ってきたので、これを読んでくださっている方は、私が無類の“TOMMY HILFIGER”好きだと思いはなからうか。そうなのだ、実は私は“TOMMY HILFIGER”を1着も持っていないのだ。持っていないかい。オンラインショップも見だし、店舗で商品も見たのだが、購入するという1歩が踏み出せないでいる。まだ、欲しいという段階で止まっているのだ。いくら他人から影響され、思考や志向が変わっても行動を起こさなければ、私の格好は変わらない。

高価な服を買うことに限らず、私は行動を起こす際、時に難しく考えてしまう。“Happiness is when what you think, what you say, and what you do are

in harmony”これはGandhiの言葉である。訳すると、「幸福とは、考えること、言うこと、することが調和している状態である」という意味になる。なるほど、幸福は意外と身近にあるものなのかもしれない。口に出すほど欲しているものは、あと1歩を踏み出すだけで幸福につながるのだ。幸い、大学では様々な国籍やバックグラウンドをもつ人と関わる機会が多い。そういった人たちの色々な考え方を吸収し、行動に移すことができる人間になりたい。

☆モリー ～進路・就職に役立つ先輩の経験・体験談～

教育実習奮闘記



「教育実習を終えて」

農業生産科学科 応用植物科学コース
観賞園芸学研究室

学部4年 姫野 歩美

夏も終わりに近づいた九月の上旬、まさに夏休みが明けたばかりという時期に、私は母校の高校に教育実習に行きました。2週間という短い期間でしたが、振り返ればとても濃い2週間でもありました。

実習に向かう前、私の頭には不安だらけでした。卒業後教員になるのかどうかも迷っていましたし、事前に教科書を貸していただき、ページを選んで教材研究をしながら「間違ったことを言ってしまうのか」「構成はこれで良いのか?」「そもそも50分持つのか?」と繰り返し自問自答していました。与えられた科目が高校時代に受けていない科目だったことも、手本が見つけられずおおいに不安材料となりました。この不安は実習開始から数日経ち、一回目の授業を終えるまで続きました。

もちろんその間、様々なクラスに授業見学に行ったり実習を共にすることがあり、参考になったり生徒との関わりの中で得るものも沢山ありました。まず、同じ学科内でも理解力



や学習意欲（興味の幅と言い換えたい）、考える進路が大幅に違っていること、この個性的な生徒全員に向かって同じ授業をしなければならないということに気づかされました。他の先生方の授業では、教え合いの時間を取ったり、分からない単語を書き出して辞書で調べる等の方法を取られており、なるほどと思うことが多くありました。また部活動や進学希望者の小論文の添削など、授業外で生徒と話す中で自分の中の緊張がほぐれていく感覚もありました。

そして実際に一回目の授業を終えてみると、思ったよりずっと授業が楽しかったことにきがつきました。当然課題は多く、とても最高の出来とは言いがたいですが、指導教員をしてくださった先生を初め多くの先生に助言を頂きながら二回目三回目と工夫しながらやっていくうち、自分の成長を感じ、自信に繋がったと思います。生徒との関わりや授業の面白さなど、教員という仕事のやりがいを見つけられた2週間だったと思います。



「教育実習で学ぶべきこと」

食料生命科学科 食環境制御科学コース
食品保蔵学研究室
学部4年 久原 大雅

私は今年の5月、母校で教育実習をさせていただきました。教育実習は大切なものではありますが、大学4年生は大学生活の中でも特に忙しい時期でもあり、かく言う自分も学会の準備や院試の勉強など忙しい日々を送っていました。そのような忙しい時期の2週間すべての時間を割いた自分の教育実習がどのようなものであったかという点、「失敗」に分類されるものだったと思います。シャイな性格から生徒となかなか打ち解けられず、研究授業も緊張からシドロモドロ、挙句の果てには担当教員からの痛いダメ出しを受けるなどお世辞にも良かったといえるものではありませんでした。しかし、私自身このような結果に対しての後悔は全くありません。というのも、この失敗を経験することによって自分なりの実習で学ぶべきことに気付くことができたからです。

実習が始まる際、大勢の先生方が学校における教師とは生徒の人生を預かる存在であり、実習生も実習が始まってしまうと立場はお客さんではなく教師であると仰っていました。そのため、生徒に対しても責任感を持って接する必要があるとも仰っており、実際に実

習初日から先生方からもそのような緊張感を感じ取ることができました。ここから教育実習とは単なる職場体験という枠に収めることのできないものであると気付くことができ、それを通して教師とは自分の行動1つが他人の人生に多大な影響を与えてしまう重大な存在だと学ぶことができました。これも十分大切なことですが、私が感じた1番の実習で学ぶべきこととはこれではありません。私が感じたものとは特に対人での職業は有機的かつ流動的なものであり、「大事なことを頭で分かっているにもかかわらず複雑に変化する現実に対応することは難しい」ということです。これは教師という職業にはもちろん、その他のものすべてに共通することではないかと思います。

私の実習はそれだけで見ると「失敗」だったかもしれませんが、大切なことを学べた人生における「糧」とすることができたと思います。忙しい時期の2週間でしたが、皆とは少し違う形かもしれませんが自分なりに充実したものにするのができたと思います。この経験を今後の人生に少しでも活かすことができれば良いなと思います。



「教育実習を終えて」

農林環境科学科 地域環境システム学コース
砂防・森林水文学研究室
学部4年 加世堂 収

5月28日私の2週間の教育実習が始まりました。通常、教育実習は母校で行うことになっていますが私は母校と日程を合わせることができず、特別に鹿児島大学教育学部附属中学校に受け入れてもらい教育実習を行うことができました。他の実習生は全員附属中の卒業生ということもあり、私は他の実習生よりも人一倍緊張していたことを今でも覚えています。緊張しすぎていて、初日の昼食時に担当クラスの生徒に「見てわかるくらい緊張していますね」と言われました。自分の担当するクラスが明るくにぎやかなクラスということもあり緊張は一瞬でほぐれました。同時に2週間を全力でやり切ろうという気持ちになりました。2週間という短い期間で自分の研究授業の教材研究であったり、ほかの先生方の授業を参観したりする日々を過ごしていると最初の1週間はあっという間に過ぎていきました。授業で生徒をどのように誘導するか、生徒はしっかり反応してくれるだろうか、実験は成功するだろうかなど様々な悩みがあり、教育実習中は朝早くか

ら夜遅くまで指導案を作成しては修正する日々が続きました。連日の疲労がたまらな教育実習をやり切れたのは、生徒から元気をもらえていたことが私にとって一番の支えでした。生徒も頑張っているのだから情けない姿は見せられないと思い私は奮闘しました。とうとう私は研究授業の日を迎え、自分の担当学級に授業をしました。前日まで理科の先生方にご指導いただき改善した授業だったので何とかなると思い取り組みましたが、シミュレーションと実際の授業では上手くいかないこともあるのだと痛感しました。結果的に私の授業はまとめの部分まで進めることができませんでしたが、生徒の興味を持って授業に取り組む様子を見ることができたので非常に嬉しかったです。生徒や先生方と一緒に過ごした忙しくも楽しかった2週間は私は忘れません。ありがとうございました。

インターンシップ



「インターンシップを終えて」

農業生産科学科 食料農業経済学コース
農業経営学研究室
学部3年 有川 俊光

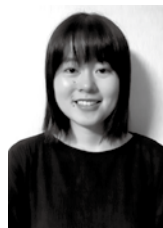
私はこの夏休み中、栃木県にある那珂川町役場の商工観光課（商工係）で5日間のインターンシップに参加しました。このインターンシップを選んだ理由は、全く縁のなかった環境に身を置き、新しい環境に慣れることが苦手な自分の課題を見つけたいと考えたからです。

那珂川町は栃木県の東北東に位置し、関東随一の清流である「那珂川」や温泉がある自然豊かな町です。この恵みを活かした美味しいグルメが揃っています。琵琶湖に生息する高級魚「ほんもろこ」は、地元の馬頭高校水産科が初めて養殖に成功し、現在は水田の遊休農地を有効活用して生産されています。グルメだけでなく、芸術や文化の魅力も多くあります。廃校を再利用して、障がい者アーティストの作品が展示された美術館があり、バリアフリーな町だと感じました。使われなくなった場所を活用していること、産学官の連携が積極的に行われていることが印象に残りました。

役場は平成29年に完成した新庁舎であり、明るく

開放感のある綺麗な職場でした。那珂川町の商工観光課（商工係）の業務内容は、中小企業・鉱業振興、雇用対策、企業誘致、そして商工業振興があります。商工業振興とは具体的に、地域ブランド認定や産学官連携事業、伝統工芸品に関する事業、商工会との連携したイベントが挙げられます。町役場は職員自体が少なくなっており、一つの課の業務が多岐にわたり、広く浅くの知識で仕事をこなさなければならないのだと聞きました。町役場という公務員の中でも最前線の仕事の難しさ感じました。

このインターンシップを通して、自分の仕事に対する認識の甘さや未熟さを痛感しました。今後に向けて貴重な経験をさせていただきました。最後に様々な話をしてくださった那珂川町の方々、地元でないにも関わらず受け入れてくださった商工観光課（商工係）の皆様、改めて感謝したいと思います。ありがとうございました。



「インターンシップを振り返って」

食料生命科学科 食環境制御科学コース
土壌科学研究室
学部3年 上芝原 日菜

今年の夏に鹿児島県農政部農業経済課で3日間のインターンシップに参加した。

周りの友達インターンシップに参加をすると聞き、自分もどこか行かなければと焦って参加したというのが正直なところだ。エントリーシートも締め切りぎりぎり提出し、志望理由や自己PRを書く際は内容の薄さを実感し、何が目的なのか、自分のどこが強みなのか、今までの学生生活を振り返り、自分を見つめ直すよい経験となった。

インターンシップの内容は農業経済課内にある農協指導係、農協検査係、金融係、農業共済係の4つの係で業務内容を学び、補助作業を行うというものであった。農業近代化資金を借りるために必要な書類や農業協同組合の検査を行うために必要な書類の作成などを行った。職員の方の話を聞く中で、資金制度の手続きや農協を検査・指導する目的を学ぶことができた。

作業以外にも3日間で職員の方々と話す機会が多くあり、仕事をしていく中での達成感や気を付けるべきことなどを聞くことができた。また鹿児島大学の卒業生の方々がいたことから、大学時代の勉強法や

やっておけばよかったと感じていることを聞かせていただき、民間を経験してから公務員になった方には自分に合う仕事をする大切さなど様々な話を聞かせていただいた。

今回インターンシップに参加したことで、業務内容だけでなく、職員の方々がどんな表情で仕事をしているのか、職場の雰囲気はどうであるかを実際に感じる事ができた。これは参加しなければ知りえなかったことであり、貴重な経験となった。それと同時に自分に不足していることや、これから何を頑張りたいのかしっかり考える機会となった。この経験で学んだ事を生かし、残りの学生生活を有意義に過ごしていきたい。



「インターンシップを終えて」

農林環境科学科 森林科学コース
森林政策学研究室
学部3年 大津 敬太

今回私は鹿児島県庁環境林務部のインターンシップに参加させていただきました。2日間に渡って県庁職員としての業務について詳しくご指導、体験させていただき多くのことを学ぶ機会となりました。

1日目は、主に環境林務部内の7課2室の業務内容について各課の担当の方からオリエンテーションがありました。鹿児島大学卒の年齢の近い先輩方もいらっしゃる中で業務内容のみならず、学生生活の相談にも親身になって聞いていただき大変有意義な時間を過ごすことができました。私は県庁職員の業務について漠然とした認識しかなかったのですが、部内の中でも各課により、全く異なる業務を行ってることを知り、今後の参考にすることができました。

2日目は治山事業を行ってる現場に同行させていただきました。大学の講義の中で、森林整備の一環として治山事業について学んでいたのですが、実際目の当たりにするとスケールの大きさが違い、衝撃を受けました。色々な方々と力を合わせて設備が完成した時には達成感があるという話を聞き、私もそのようなやりがいのある仕事に就きたいと強く思いました。その後は、製材会社に行き、製材の様子を見学させていただきました。ここでも講義の中で聞いたことのある「2×4部材」等を実際に見せていただき学びをつかめることができました。

今回のインターンシップを通して私は、県庁職員の方々の業務についてはもちろんのことながら、今現在

私たちが大学で学んでいることが、社会に出た時にどの場面で役に立つのかということを肌で感じる事ができました。また、森林、林業に関わる方々がどのような気持ちで働いているのかということも知ることができたため、これまで以上に学習に意欲的に取り組み、将来の自分の可能性を広げるためにも頑張りたいと思いました。

介護体験記



「介護等体験を終えて」

農業生産科学科 応用植物科学コース
害虫学研究室
学部3年 久保 悠

今年の夏季休業中に私は介護等体験の実習をデイサービスひなたの家で5日間行わせていただきました。

デイサービスひなたの家では、利用者さんのバイタルチェック、配膳、食事介助、入浴介助、レクリエーションをスタッフの方々と一緒にしました。デイサービスひなたの家には様々な困難を抱えた方がいらっしゃって、どのように接するべきか戸惑うこともありましたがスタッフの方々のアドバイスもあり徐々に上手くコミュニケーションを取ることができるようになりました。

デイサービスひなたの家での実習で特に印象に残っている経験は食事介助とレクリエーションの時間の経験です。食事介助をする際にまず悩んだことは何を選ぶのかということでした。自分が食べる時には自分の好きなように選んで食べていますが、利用者さんの中には意思疎通を図ることが難しい方もいらっしゃったため食べる順番や量を決めるだけでも非常に気を遣いました。また最終日に自分で考えたレクリエーションを利用者さんと一緒にする中で気づいたことは全員が楽しめる内容を考えることの大切さでした。利用者さんが抱えている困難は様々なものがあり、一人一人でできることが異なるため一つのレクリエーションを楽しめる方と楽しめない方がいることに気づきました。全員が同じように楽しむことは難しくても種類を組み合

(14) あらた同窓会学生向け会報

わせることで全員が一つでも楽しめるような工夫をすることが必要だと感じました。

5日間という短い期間ではありましたが、以上に挙げたこと以外にも数多くのことを学ぶことができた介護等体験になりました。今回の介護等体験で学んだことは様々な個性を持った児童・生徒に関わる教師になる上でも、これから社会に出て今まで以上に多様な人々と働いていく上でも大切なことばかりでした。自分とは全く立場の異なる人の身になって考え、行動することは簡単なことではありませんが少しずつでもできるようになっていきたいと思いました。

留学報告



「デンマーク生活」

農業生産科学科 応用植物科学コース
害虫学研究室
学部3年 木本 朝美

約11か月間、デンマークで外国人になる経験をした。大学で農学について学ぶ中で、有機農業に特に興味を持つようになった。実際に有機農業先進国で学びたいと考え、デンマークのオーガニック商品を扱う企業でインターンを行う計画を立てた。そして、文部科学省と民間企業の官民協働プロジェクト「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム」の派遣留学生として採択され、デンマークへ飛び立った。

インターン活動では、有機農業やオーガニック商品の販売、パーマカルチャー（持続的農業）を実践するエコビレッジの見学などを行った。デンマークでは普通のスーパーに有機農産物が多く並んでおり、コンビニのコーヒーにもオーガニックのロゴがあることに驚いた。また、選挙期間中、環境政策についても多く議論されていたことが印象的であった。デンマーク人曰く、デンマークでタブーな話題はないという。ご近所さんのゴシップから政治についてなど様々な話題をよく耳にした。

また、留学中、シリアなどからの難民、東欧などからの出稼ぎの方々など、“外国人”と関わる機会も多

くあった。各国の事情について聞くことができ、貴重な機会であった。しかし、インターン中、“外国人”から冷たい態度を取られることもあり、当時はとても落ち込んだ。“裕福な国”日本からわざわざやって来て自分の仕事を奪われるのではないかという懸念からの態度だと、デンマーク人に教えられ衝撃を受けた。“日本”から来たというだけで、人に与える印象は様々なのだと知った。もちろん、日本についての多くのポジティブな感想ももらった。



留学では、日本でなかなか経験できない学びや出会いがあり、自分を見つめ直す良い機会であったと感じる。留学以前、私は精神的に落ち着いている方の人だと思っていた。しかし、留学中は自分でも驚くほど感情の浮き沈みが激しかった。普段、日本という母国にいて、家族や周囲の人に支えられていることの有難さを改めて感じた。また、トビタテプロジェクトは、奨学金だけでなく、留学前後の研修、留学中のメンター制度など、あらゆる面で留学のサポートをしてくださった。留学を支えてくださった多くの方に感謝している。



「国際協力農業体験講座を通して」

国際食料資源学特別コース
学部1年 植野 真由

9/13～9/23の期間、私はミャンマーで畜産に焦点を当てた国際協力についての研修を行いました。現地に行くにあたって、まずは日本の畜産について知るために事前研修として日本の農家を訪れたりもしました。私がこの研修に応募した理由は、海外に興味があったのと、牛などの大動物が好きだということ、それだけの理由でした。そのため畜産についての知識はゼロ

の状態での参加でしたが、事前研修のおかげで少しは畜産のことを知ったうえでミャンマーに行って、ミャンマーと日本の畜産の違いをはっきりと感ずることができました。

まずミャンマーに着いて一番驚いたのは、トウモロコシ畑の多さです。見渡す限りトウモロコシで埋め尽くされているところもあって思わず見とれてしまうほどでした。後から農家の方々の話を聞く中で、家畜のえさにしたり収入源になっていることを知って、トウモロコシが大事な役割を担っているのだなと感じました。その他にも日本の畜産のやり方とは全く違う部分をたくさん見ました。国が違うだけでこんなにも違いがあるのかと、実際に現地に行ってみることでより深く考えることができました。国際協力というものについては、はじめ持っていたイメージと大きく異なっていました。先進国が発展途上国にもものを提供する、ということが国際協力だとずっと思っていました。多分、そう考えている人も少なくはないと思います。しかし国際協力というのは、2か国がお互い苦手な部分を補って協力することではないかと自分なりに考えました。



この研修を通してたくさんのことを学ぶことができました。畜産や国際協力についてはもちろん、外国に行くことで人々の暮らしの違いや言葉の通じない国で

のコミュニケーション能力の必要さも学びました。なかなか経験できないことができた、充実した10日間でした。この研修で学んだことを忘れずにこれからの大学生活に活かしていきたいです。



「世界の中の日本」

食料生命科学科 食環境制御科学コース
食品保蔵学研究室

学部3年 今村 仁風

私は今年の3月に中国、9月にタイの2度、大学の授業で海外に行く機会をいただいた。今まで育った日本とは環境も文化も異なり、そして何よりも日本語が通じない場所での生活は毎日が新しい発見に満ちており、根本的なモノの考え方から変えるきっかけとなった。

中国は華中農業大学と雲南農業大学に計2週間滞在した。空港からの移動中、道路の周りを高層ビルが立ち並び、テレビで見た大国に来たことを実感した。一方で、日中間の政治的な問題で日本人の私たちに対して負の感情を抱いているのではないか、という心配もあったが、それは杞憂に終わった。出会った中国留学生の多くは日本のドラマやアニメ、音楽などをリアルタイムで視聴しており、日本文化も一定程度認知していた。私たちに対しても温かく迎え入れてくれ、去る時には以前からの友人であったと思うほど仲良くなっていた。大学の敷地が広大で驚いたが、何よりも大規模な研究設備の数々が衝撃的であった。日本の大きな研究所にあるかどうかという規模の巨大な施設が中国の一大学に存在しているのである。また、学生たちもアルバイトを頑張るよりも、研究成果をあげることのほうが出世につながると信じて、熱心に研究に励んでいた。人口10倍以上、国土が25倍、GDP世界2位の大国を目の当たりにし、そんな世界と渡り合うためには人並み以上の努力をしなければならないと実感させられた。

タイでも現地の学生の温かいもてなしを受けた。タイで驚いたことは英語の普及の度合いである。中国の学生もさることながらタイの学生も流暢な英語を話し、さらにタイでは学外の施設や露店でさえも英語で

(16) あらた同窓会学生向け会報

コミュニケーションをとることができた。

海外を訪れるまでは外国のことを単なる数値やテレビ等のメディアで報道されることでしか知らなかったが、それは全てではない。やはり一番信頼できる情報は自分で見聞きした一次情報なのだ、と実感させられた。また今までは、身の回りの限られた環境で人と比較して満足している自分がいたが、世界の人口は76億人。現状に満足せず、広い視野を持って勉学に励みたい。



「欧州海外研修報告」

農林水産学研究科

森林政策学研究室

修士1年 加藤 小梅

私は今回、「海外森林・林業事業」という授業で10日間フィンランドとドイツに行きました。私は高校生の時に1度修学旅行で海外に行ったことはありましたが、それ以外で海外に行ったことはありませんでした。大学に入る前は漠然と海外で留学したいと思っていましたが、実際に大学に入ってから留学に行くという行動は起こせなかったため、今回、授業で海外に行くことができるという貴重な機会を絶対逃すわけにはいかないと思い、授業を選択しました。

今回の留学では海外の森林や、林業に関することについてたくさんの方からお話を聞かせていただいたり、いろんな施設の体験や工場見学などを通して、海外の森林に興味を持つだけでは無く、改めて日本の森林に対する理解を深めることができました。また、ドイツの研修から一緒に行動した他大学の方たちとの交流、ドイツで泊まったユースホステルでドイツの高校

生たちとの交流、空港や駅、お店など海外の方とやりとりしないといけなくて場での片言の英語をなんとかつなぎ合わせて自分の意思を伝えないといけなかったこと、海外の方に話しかけられたときに何とかして理解しようと頭をフル回転させたこと…など今まで経験した事ないようなことばかりで大変でした。けれど、それ以上にとっても楽しくて研修の間ずっとワクワクしていました。

今回の研修に参加するまでは、日本の東京のような都会にさえ行けば世界が広がる、全てが手に入ると思っていました。日本だけで十分、英語なんて何で勉強する必要があるくらいに思っていました。自分が思うよりもっと世界は広くて、いろんな人がいて、いろんな考え方、いろんな文化があったことを実感させられました。それらと関わらないで生きていくのはもったいない事だと思うようになり、将来海外で活躍できるような人になれたらいいなと思うようになりました。



10日という短期間の海外だったけれど、自分のこの世界観、価値観を大きく変えてくれる本当に素晴らしい体験でした。本当に世界が広がると思うので、迷っている人がいたらぜひ海外に行って欲しいです。この研修に参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。



編集後記

学生の皆さんと行事や仕事の日程調整をすると、「その日はバイトで、厳しいです。」という言葉をよく聞きます。もちろん人にもよるのですが、アルバイトが学生生活の中で、非常に重要な位置を占めているのだなと感じます。

現代の学生生活は、お金がかかります。高額な授業料を負担しなければならない人がいるかも知れません。嵩む生活費を自弁しなければならない人もいるでしょう。また様々な欲しい物を手に入れ、やりたい事をするためには先立つものが必要です。そのお金が手に入るのですから、アルバイトは重要なのでしょう。また世の中は、基本的にお金をめぐって動いています。そのお金が生み出されている現場にはいろいろな問題があり、様々な人間模様があります。そういうものを垣間見ることができるのも、アルバイトの魅力かも知れません。

ただし注意が必要です。お金を稼ぐために働くことは大変なことで、相当の体力や精神力を消耗します。またお金を稼ぐことは大変魅力的なことなので、他のことが冷静に考えられなくなる人がいます。自分にとって働くということはどういう意味があるのか、時々ふり返ってみることが大切だと思います。

(文責 食料生命科学科 樗木直也)

鹿児島大学農学部 あらた同窓会

〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目21-24

TEL・FAX 099(285)8537

e-mail(arataakai@mc2.seikyo.ne.jp)

振替口座 02010-2-876

事務局の業務日 月・水・金(10:00~16:00)

印刷所	株式会社鹿児島新生社印刷
住所	鹿児島市七ツ島1-1-1
TEL	099-261-0111
FAX	099-261-3100
E-mail	kagoshima@shinsei-p.co.jp





鹿児島高等農林学校講堂の校章（徽章）